ちょっと　暖まる　はなし

鍋島　惠美

新しい出会いが始まる季節です。保育者であるわたしの生活もずいぶん年を重ねてきました。それでも春は、心ときめくときです。二年前に出会ったNちゃんという女の子の話をしたいと思います。この年は、五歳児と一年だけ生活をともにすることになりました。

鼻くそが見つからないの

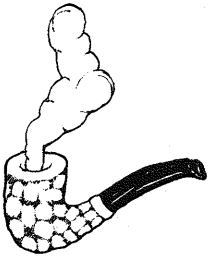
十月の誕生会に遊戯室に集まったときです。

「先生、Nちゃんな、鼻くそ落としてしもたの。探したけどみつからへんの。どうしょ？」と、尋ねられ「？？？」冗談と思うには、N子の表情が

あまりにも真剣だったので「そう。鼻くそは、大丈夫。落としておいてもいいよ。だってこんなに小さいでしょ」と、手で小ささを示して伝えると、「へへぇ。そうか。ごめんなさい」と、N子。実に妙な会話を交わしました。この頃、彼女は、家庭でも大人からすれば、滑稽とも思えることで「どうしよう？　ごめんなさい」という話しかけがあったようです。お母さんが、第三子を身ごもられて体調が優れず入院をされていた時期でもあり、お父さんも「母親のことも関係するんでしょうか」と、今のN子の様子を受け止めておられた。

みんなで攻めんかってええやんか！
もう　みんな　嫌い！

年が明けて二月。五、六人の生活グループごとに牛乳を飲んでいたときのことです。N子のグループは、誰が、牛乳を飲んだ後のテーブルの片づけをするのか、ジャンケンで決めることになったようでした。「もうみんな嫌い！」と、N子がワァーと泣き出しました。同じグループのY子が、「Nちゃんのこと信じてるえ」M子も「わたしも信じてるって。泣かんときって」と、子ども達の慰める声が聞こえてきます。しばらく様子を観ながら、わたしも「どうしたの」と、声をかけました。N子は、「みんなが、攻めはる。わたしは、後出ししようと思ってしたんと違うのに」と、泣きじゃくりながら話してくれました。どうも、最後のジャンケンの勝負が、H男とN子になって、結果的には、N子の後出しになってしまい、その場にいる仲間から、「Nちゃん、後出しずるいで」と、攻めら



れたようです。「そうやったんか。Nちゃんは、後出ししようとしたのと違うんだね」と、わたしが話すと、N子はうなずきます。ジャンケンの相手だったH男は、自分は攻めたわけでもなく、ことの成り行きに身の処しようがなく困り顔でいました。その場は、互いに納得して収まりましたが、何となくそのグループは、いい感じの空気が流れていませんでした。

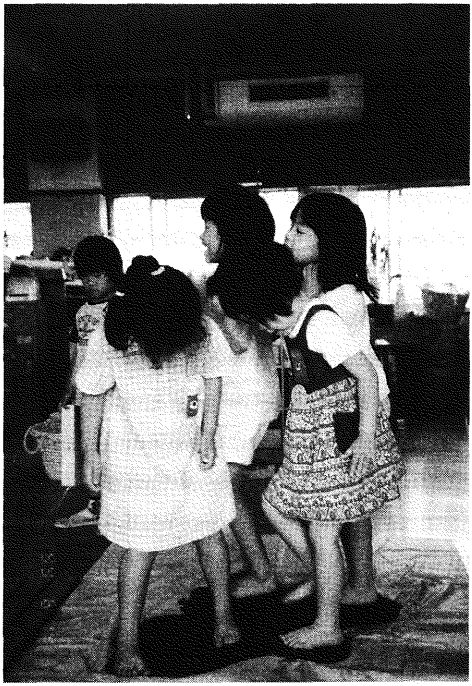
いいところ観たわ！　わたしも観た！

子ども達が牛乳を飲み終えて、みんなが集まるのを手遊びをしながら待っていました。N子は、泣きやんだものの悲しい気持ちは、まだ癒えないようで目に涙をいっぱいためながらグループのテーブルを片づけ始めました。その姿を見たH男が、さっと立ち上がってN子の後を追いテーブルを持つのに手を貸してやりました。N子のことを気にとめていたわたしの目に、二人の姿が入ってきました。「わたし、今とってもいいところ観たわ」と、クラスのみんなに思わず言葉をかけていました。すると、H子も「わたしも観た」と返してくれました。泣いて訴えたN子のことを気にかけていたのは、わたしだけでなく、H男もY子もいたのです。そのことがよけいにわたしの心を弾ませてくれました。そのうれしい思いをクラスのみんなに伝えました。すると、クラスの中にファーと暖かい空気が流れるようでした。みんなの顔がにこにこしていました。

帰る支度が整って、N子とわたしが二人になる時を得ました。N子が「今日は、悲しいことがいっぱいあった」と、言いました。朝の遊びのもめ事といい、帰りがけのこの事件といい本当に今日は、N子の泣き顔をよく目にした一日でした。

「そうやったね。でも、最後は、Hちゃんも手

伝ってくれたし、いつも仲良しのYちゃんやMちゃんも信じてるって言ってくれたし、うれしいこともあったね。悲しいこともあったけど、うれしいこともあったね」と、話すと、N子は、「うん」と、うなずきました。わたしが、「元気になるかな」と、尋ねると「うん」と、N子の返事。「じゃ、涙を拭いて帰ろう！」と、弾みをつけ伝えると、彼女もわたしの心がわかったとみえ、涙を拭いて元気な足取りでテラスを駆けていきました。この日のこのエピソードを迎えに来られた保護者の方に、子どもの思いやりとして伝えました。聞いておられた大人の表情が、ほっとゆるむのがわかりました。



◀〝気持ちいいなあ〟土粘土に触れて　心もからだも弾む

ひとりになりたいの　ほっといて！

修了式を間近に控えた三月の朝です。N子と仲良しのY子とM子。M子と仲良しのR子に、W子も加わって、ままごと遊びを始めていました。そ

こへ、後からN子が遊びに参加しました。「もういい！　ほっといて！　もういいって言ってるやろ」と、激怒したN子の声が響いてきました。何事がおこったのかと様子を観ていますと、今度は、そばにあった小型積み木を振り上げて「もういいって言うてるやろ！　Nちゃんは、ひとりになりたいの！」と、泣きわめきだしました。ものを振り上げ、こんなに感情が高ぶっているN子を見るのは、初めてです。どうしていいのかわからないでいる仲良しのY子の心が、わたしにはよくわかりました。これ以上この状況のままもよくないと思いわたしは、「Nちゃんは、ひとりになりたいのか。そうなのか。わかったよ。こっちへおいで」と、N子をその場から離して落ち着けてやりたいと思いました。

隣のクラスのストーブのあるところへ一緒に行きました。「ここだと暖かいし、ここでしばらくひとりになったらいいね。暖まったらいいよ」と、けんかのことは聞かずに、今の感情を納めるのにいい場所を提供しました。そこは、ちょうど保育室の片隅で、じゅうたんが敷かれ、おもちゃ棚でしきりのあるちょっとした空間でした。S男がひとり暖をとっていました。その横に、N子をかけさせてやりました。N子は、けんかの場所から離れることで、感情が落ち着いたようで、わたしの話しかけにうなずいて応えてくれました。

それから、わたしは、Y子達の所に戻り、「どうなったの？」と、さっきのいきさつを聞いてみました。M子が、「MとRちゃんとが一番上のお姉さんで」と、話し出すと、W子が、「Wが、お母さんでな、Yちゃんが、赤ちゃんでな、Nちゃんも一番上のお姉さんになりたいって言わはってん」と、次々に話してくれました。どうもなりたい役が重なったことからのけんかのようです。そ

のことで話し合いになった時に、後から参加したN子は、すでに仲間で話がまとまってしまっていることに憤慨したようです。そして、そのことがとても寂しかったようです。Y子達に「誰でもひとりになりたいことって、あるよね。Nちゃんもひとりになって暖まったら大丈夫にならはるやろ」と、わたしは話しました。彼女たちもそのことはわかってくれたようで、再び遊びだしました。

ただいま　さっきはごめんな

ずいぶん経ってから、N子がもとのところへ戻ってきました。どうするのかと思い離れてみていますと、「ただいま。さっきはごめんな」と、N子が謝りました。Y子達は、一瞬黙ったままでした。少しの間合いがあり、Y子が、「いいよ」と、返事をしたことから、N子が仲間入りして、再び自然に遊びが続きました。わたしは、感無量

▲「怖がらなくていいよ　お姉ちゃんだよ」　――三歳児と遊ぶなかで――

でした。子ども達がここまで心を素直に表現して受け入れあえるとは思いませんでした。この出来事を帰る前の集うひとときに、クラスのみんなに、当事者の顔を見ながら語りました。話が進むなかで、W子は、「それは、Wやな。けんかになったんやな」と、自分たちのことに思い返しながら話を聞いていました。わたしは、クラスで歌っていた『みんなともだち』（作詞・作曲　中川ひろたか）の歌を歌いたくなり、みんなと一緒に歌いました。そして、「あったかーい話でした」と、語り終えたとき、N子が、そばに来て、わたしの耳元に「先生、もっと暖かかったこというたげよか」と、話しかけてくれました。わたしが、うなずくと、「ストーブにいたときにな、I君がな、暖かいでって、モルモット抱かせてくれたの」と、N子が教えてくれました。「そう。それは暖かかったやろうな。よかったね」と、わたしが答えると、にこっと笑って自分のいたところに戻って行きました。偶然の出来事でしょう。その偶然の重なりがすごいことに思えました。ひとりでいたN子のからだが、ストーブで暖まり、肌にモルモットの暖かさが伝わり、そうしているうちに、心が和んできたのでしょう。保育者の言葉を越えるできごとでした。

こんなに心が素直に語り合える子どもと、そしてその周りにいる子ども達に出会えたことが幸せでした。Nちゃんが暖まると同時にわたしの心もあつくなりました。心凍るような出来事が、子どもを巻き込んで起こる時代に、こんなエピソードをわたしの周りにいる人と分かち合って暖まってきました。わたしは、今の時代だからこそ、あえて心を伝え分かり合っていきたいと思います。

（京都教育大学教育学部附属幼稚園）